Kurume University
Psychological Research 2008, No.7, 19-28

中日大学生の独立意識と親子関係

高　　天　碩[1)]
木　藤　恒　夫[2)]

要　約

異なる文化をもつ社会では，青年期段階の親子関係はどのような差異があるのか。また，その差異が「独立意識」といった側面における子どもの成長にどのように反映するのかについて調べた。中国と日本の大学生を対象として，親子関係尺度（落合・佐藤，1996）の縮小版と独立意識尺度（加藤・高木，1980）を用いた質問紙調査を行い，両国の大学生のデータを比較した。その結果，中国人大学生が日本人大学生よりも親に対して高い依存性を示すことが明らかになった。ただし，独立意識においても中国人大学生が日本人大学生より有意に高いことが示された。これらの結果を導くものとして，両国の文化的背景と社会的背景を考察した。

キーワード：中日比較，青年期，親子関係，独立意識

青年期は，子どもが親に依存する関係にはじまり，親から独立し親と対等な関係に至る過程であると考えられている。この過程における親子関係は子どもの発達の様々な側面に重大な影響を及ぼすことが知られている。児童は一般に，家庭と学校を中心に生活している。大人である親や教師に対しては，依存的な感情をもっており，彼らに肯定的な態度を保ち，全幅に近い信頼を寄せている。ところが青年期に入ると，このような依存的，肯定的な関係はしだいに変化し，精神的に独立しようとする傾向が芽生え，大人への依存から脱しようとする。具体的には，親に対する批判や反抗という形で現れてくるようになる。エリクソンは青年について次のように述べている。青年は，明らかに信頼しうる人間や観念をきわめて熱烈に求めることであろう。その人間や観念とは，その面前で自分が信頼に値するものであると証明することに価値がある，と考えられるようなものをも同時に意味している。しかしながら，同時に，青年は，バカげた，信じて疑うことのないような帰依（コミットメント）をする恐れがあるし，また，逆説的なことだが，何も信じないと言いながら何かを信じたいという欲求を，表明することもある（Erikson, 1968　岩瀬訳　1973　167頁）。

青年期における親子関係の変化は，青年の独立心・依存心といった意識とも関連が深いものと考えられる。こうした青年の心理的側面を定量的に測定する試みは，加藤・高木（1980）によって行われている。彼らは因子分析により抽出された3因子に対応する尺度項目を決定した。彼らの作成した独立意識尺度では，第1の尺度は「独立性」の尺度と命名された。ここに含まれる項目は，主に青年の自己に対する自信や自負に関するものであった。この尺度は，自分らしい生き方や自分の判断への自信がどの程度に確立しているかを測るものであると言えよう。第2の尺度は「親への依存性」の尺度と命名され，親からの指示や情緒的援助を期待する程度を測定するものであった。第3の尺度は，「反抗・内的混乱」の尺度と命名され，大人（親や教師）に対する根拠のない反発や自分の劣位意識を定量化しようとするものであった。加藤・高木（1980）は，

1）久留米大学大学院心理学研究科
2）久留米大学文学部心理学科

中学生，高校生，および大学生を対象にこの独立意識尺度を用いた調査を実施し，反抗・内的混乱尺度は成長に伴いその得点が低下するものの，独立性尺度得点には発達的変化は見られなかったことを示した。また，親への依存性尺度は，男子では中学生，高校生，大学生に差が見られないのに対して，女子の場合では，高校生と大学生は中学生よりも高い得点が得られたという結果を示した。

初期・中期の青年は親から全く独立をしているわけではなく，相談者・助言者としての親を部分的に肯定していることが多い。実際，青年に対するいくつかの調査では，受験や就職などの大切なできごとに関しては，両親のどちらかまたは双方に相談すると答えているものが少なくない。

親は，無力な子どもに養育としつけを行い，何とか自立できるように育てようとする。子どもは，親に依存しつつも，反発したり，独立したりしようとする。このようなダイナミックな親子関係が，形態は変化しつつも長い期間にわたって続いていく（鈴木，2003）。落合・佐藤（1996）は，親子関係の変化から見た心理的離乳への過程について述べている。彼らによれば，この時期の親子関係は大きく5段階に分類され，青年期前期においては，「親が子を抱え込む関係」や「親が子を危険から守る関係」，および「子が困った時に親が支援する親子関係」であるのに対して，青年期後期においては，「子が親から信頼・承認されている関係」や「親が子を頼りにする関係」へと移行していくと主張した。

独立意識と親子関係の関連に関しては，日米の青年を対象とする比較研究が小野寺（1993）によって実施された。小野寺は様々な質問項目を設定し，米国および日本の大学生の回答を多面的に比較した。その結果，独立意識に関しては，全般的に日本人学生の方が米国人学生よりも低く，さらに日本人の中でも，女子学生が男子学生よりも有意に低いことを見出した。また，父親や母親に対する情緒的に結びつきや愛着に関しては，日本人の大学生には顕著な性差が存在し，男子大学生は非常に低い値を示した。日本の女子学生はそれに比べ高い得点ではあるが，米国の男女学生はさらに高い得点を示す傾向が見出された。いわゆる先進国であると言われる日本と米国では，経済・政治体制や人口政策などに様々な類似点があるにも関わらず，青年の独立意識や親子関係において大きな差異があることが示された。

ところで，中国と日本という2つの国を対象とした場合，物理的距離としては隣国とも言えるにも関わらず，文化的伝統や経済・政治体制には様々な違いがある。特に現代中国には「一人っ子政策」という独特の人口政策があり，それを背景とした親の養育態度は，子どもと親の間に特別な関係を形成すると推測される。

中国は1978年以来徹底した「一人っ子政策」を進め，すでに30年近くが経過した。現代中国の高校生・大学生にはほとんど兄弟がいない「一人っ子」である。一般に，子どもの数は親の養育態度を規定するひとつの条件である。子どもの人数が少ないと，必然的に親子の接触時間が長くなり，親の世話と干渉が増加する。特に一人っ子の場合，子どもがただ一人ということが親の過保護，過教育という養育態度を助長しやすい（長田，1972）。また，一人っ子の母親たちは二人以上子どもを持っている母親と比べて，自分自身を過保護，過干渉な母親と認知しており，逆にそうならないことについて敏感になり，厳格なしつけをする傾向も見られる（繁多，1991）。

本研究の目的は，中国人大学生と日本人大学生の比較を通して，両国の大学生が親とどのような親子関係を構築しているのか，また，その親子関係が大学生の独立意識にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする。

方　法

被験者

中国人の被験者は中国B大学学生220名（女性99名，男性121名）であり，平均年齢は女性19.8歳，男性20.1歳であった。日本人の被験者はK大学の学生157名（女性67名，男性98名）であり，平均年齢は女性19.5歳，男性19.2歳であった。

調査方法及び質問紙

質問紙は2つの尺度で構成されていた。ひとつは，被験者の独立意識を測定するものであり，加藤・高木（1980）の独立意識尺度を用いた。この尺度は，「独立性」を問う項目が10項目，「親への依存性」と「反抗・内的混乱」を問う項目がそれぞれ5項目あり，合計20項目で構成されていた。回答は，「全く当てはまらない・・・1点」から「全く当てはまる・・・5点」までの5件法で求めた。もうひとつは，母親および父親との親子関係についてそれぞれ81項目で構成された落合・佐藤（1996）の親子関係尺度を縮小したものを用いた。原尺度のうち，因子負荷量が高い3因子「子が親から信頼・承認されている親子関係」，「親は子を危

険からまもる親子関係」,「親が子と手を切る親子関係」に着目し，各因子に関わる質問項目をそれぞれ7項目のみ選択し，母子関係と父子関係について，それぞれ21項目で構成した。回答は，独立意識尺度と同様，「全く当てはまらない・・・1点」から「全く当てはまる・・・5点」までの5件法で求めた。

中国人大学生に対しては，2つの尺度を第一執筆者が忠実に中国語に翻訳したものを用いた（付録1，2，3を参照）。

調査期間

日本人大学生の被験者に対しては，講義時間を利用して，2006年の7月と10月の2回に分けて集団調査を実施した。また中国人大学生の被験者に対しては，同年8月に同様の方法で調査した。

結　果

独立意識の分析

中国人大学生と日本人大学生の独立意識尺度の得点の平均値，標準偏差と分散分析の結果を表1に示す。

独立性，親への依存，および反抗・内的混乱の得点についてそれぞれ1要因の分散分析を行った。独立性に関しては，10項目中の5項目において有意差が認められた。なお5項目の内に自信と将来の生き方や自己判断についての4項目において，中国人大学生の得点が日本人大学生の得点より有意に高かった。一方，「たとえ学校の成績が悪くても，人間として，ひけめを感じることはない。」についての答えは，日本人大学生が中国人大学生よりも有意に高い得点を示した。

親への依存についての5項目のうち，有意差が見られたのは「自分で決心できないときは，親の意見に従うようにしている。」と「何かする時には，親に励ましてもらいたい。」の2項目であった。いずれも中国人大学生の得点が有意に高かった。

反抗・内的混乱については，5項目のうち1項目（「両親を理解しようと思うのだが，つい反抗し，けんかになることが多い。」）にのみ有意差が見られ，中国人大学生の方が高い得点を得た。

独立意識尺度のうち，独立性，親への依存，反抗・内的混乱の3因子すべてのいくつかの項目において中国人と日本人の大学生間に有意差が認められ，両国人の青年期における独立意識には違いがあることが判明した。日本人大学生より自己に対して高い自信や自負を持つといった独立性が高い中国人大学生が，一方では親への依存性が高いことが明らかにされた。また，中国人大学生は比較的に親への反抗意識を持ち，内的混乱な状態に陥いる傾向があることも示唆された。

親子関係の分析

中国人大学生と日本人大学生の親子関係については，母子関係と父子関係に分けて検討した。

まず，母子関係についての評価得点の平均値，標準偏差と中日間の分散分析の結果を表2に示す。母子関係尺度の第1因子「子が親から信頼・承認されている親子関係」の7項目のうちに有意差が見られたのは，「母親は，私の考えを尊重し，自分の意見を押し付けることはない。」と「母親は，私を信頼してくれている。」2項目であり，いずれも中国人大学生が日本人大学生より有意に得点が高かった。第2因子「親は子を危険からまもる親子関係」の7項目すべてにおいて有意差が見られた。日本人大学生が中国人大学生より有意に得点が高かったのは，「私が夜遅く帰るときは

表1　独立意識尺度（加藤・高木，1980）中日比較。●印の項目は逆転項目。

	日本		中国			
	m	SD	m	SD	F値	
独立性						
たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひけめを感じることはない。	3.38	1.13	2.90	1.47	4.07 *	日＞中
●自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。	2.77	1.32	2.33	1.21	3.99 *	中＞日
●小さなことでも、自分で決断することができない。	2.25	1.06	1.56	0.88	16.96 **	中＞日
生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	3.50	1.05	4.10	1.12	9.82 **	中＞日
自分の人生を自分で築いていく自信がある。	3.46	1.07	4.18	1.00	15.99 **	中＞日
親への依存						
自分で決心できないときは、親の意見に従うよう	2.73	1.09	3.53	1.20	15.57 **	中＞日
何かする時には、親に励ましてもらいたい。	3.20	1.20	3.77	1.22	7.19 **	中＞日
反抗・内的混乱						
両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。	1.96	1.03	2.80	1.46	13.49 **	中＞日

+p<.10 *p<.05 **p<.01

迎えに来てくれる。」の1項目だけであり，残りの6項目は，中国人大学生の得点が有意に高かった。第3因子「親が子と手を切る親子関係」については，7項目のうち5項目で日本人大学生より中国人大学生の得点が有意に高かった（表2を参照）。これらの結果は，中国の母親は日本の母親よりも大学生になった子どもを信頼し，考えを尊重するが，子どもを危険から守るという意識のもと，子どもの活動を干渉する傾向があ

表2　親子関係尺度（落合・佐藤，1996）の縮小版―母子関係の中日比較

	日本		中国			
	m	SD	m	SD	F値	
子が親から信頼・承認されている親子関係						
母親は、私の考えを尊重し、自分の意見を押し付けることはない。	3.38	1.26	4.01	1.15	9.00**	中＞日
母親は、私を信頼してくれている。	3.82	1.11	4.19	0.98	4.04*	中＞日
親は子を危険からまもる親子関係						
母親は、私の夜の外出を許可してくれない。	2.27	1.26	3.31	1.45	18.24**	中＞日
母親は、私に夜一人で外出させないようにしている。	2.56	1.39	3.93	1.19	36.67**	中＞日
母親は、私が盛り場やゲームセンターに行く事を禁止している。	1.75	1.07	2.16	1.27	3.91+	中＞日
私が夜外出するときには、母親がついて来ることが多い。	1.62	1.02	2.31	1.28	11.11**	中＞日
母親は、私が夜遅く帰るときは迎えに来てくれる。	3.44	1.47	2.89	1.48	4.42*	日＞中
母親は、私が酒やタバコに近づけないようにしている。	2.11	1.34	3.54	1.41	34.12**	中＞日
私への危ない誘いは、母親が断ってくれる。	1.96	1.31	3.07	1.27	24.00**	中＞日
親が子と手を切る親子関係						
母親は、私をほったらかしにしている。	1.45	0.78	2.31	1.23	20.61**	中＞日
母親は、私に家に帰ってこなくてもいいと言う。	1.25	0.55	2.56	1.45	40.28**	中＞日
母親は、「勝手に生きればよい」と言って私の世話はしてくれない。	1.13	0.38	1.81	1.00	23.05**	中＞日
母親は、私が何をしてもお構いなしである。	1.40	0.78	2.04	1.07	14.11**	中＞日
母親は、子供のことについて責任を取る必要はないと言っている。	1.18	0.47	1.43	0.76	4.60*	中＞日

+p<.10 *p<.05 **p<.01

表3　親子関係尺度（落合・佐藤，1996）の縮小版―父子関係の中日比較

	日本		中国			
	m	SD	m	SD	F値	
子が親から信頼・承認されている親子関係						
父親は、私のことを精神的に大人になったと認めている。	3.25	1.04	3.75	1.11	6.95**	中＞日
父親は、私の考えを尊重し、自分の意見を押し付けることはない。	3.71	1.32	4.16	0.95	4.94*	中＞日
父親は、私を信頼してくれている。	3.77	0.98	4.20	0.84	7.16**	中＞日
父親は、私が大人であることを認めてくれている。	3.39	1.06	3.96	0.96	10.21**	中＞日
親は子を危険からまもる親子関係						
父親は、私の夜の外出を許可してくれない。	2.25	1.35	3.53	1.30	29.50**	中＞日
父親は、私に夜一人で外出させないようにしている。	2.45	1.45	3.66	1.28	25.83**	中＞日
父親は、私が盛り場やゲームセンターに行く事を禁止している。	1.63	1.04	2.38	1.41	11.25**	中＞日
私が夜外出するときには、父親がついて来ることが多い。	1.38	0.70	2.17	1.28	17.39**	中＞日
父親は、私が酒やタバコに近づけないようにしている。	1.80	1.04	3.31	1.28	51.56**	中＞日
私への危ない誘いは、父親が断ってくれる。	1.89	1.18	3.12	1.30	30.70**	中＞日
親が子と手を切る親子関係						
父親は、私に家に帰ってこなくてもいいと言う。	1.43	0.80	2.79	1.42	41.48**	中＞日
父親は、「勝手に生きればよい」と言って私の世話はしてくれない。	1.45	0.80	2.00	1.25	8.35**	中＞日
父親は、私が何をしてもお構いなしである。	1.79	1.03	2.14	1.28	2.93+	中＞日
父親は、子供のことについて責任を取る必要はないと言っている。	1.39	0.72	1.68	1.00	3.19+	中＞日

+p<.10 *p<.05 **p<.01

ることが示された。一方，日本の母親はあまり子どもの活動を制限しないが，大人になっていく子どもを中国の親ほど完全に手放さないことが示された。

表3は，父子関係における評価得点の平均値，標準偏差と中日間の分散分析の結果を示す。第1因子の7項目のうちに，中国人大学生が日本人大学生より有意に得点が高かったのは「父親は，私のことを精神的に大人になったと認めている。」などあわせて4項目であった。母子関係尺度の同じ因子に比べて，両国の父親が母親より子どもの能力を承認し，信頼できると評価する傾向があるとみなされる。第2因子の7項目のうち，「私が夜遅く帰るときは迎えに来てくれる。」以外の6項目は中国人大学生が日本人大学生より有意に得点が高かった。第3因子においては，7項目中の4項目において有意差が見られ，他の因子の項目と同様に中国人大学生の得点が日本人大学生のものよりも高かった。

考　察

独立意識について

本調査では，中国人大学生が日本人大学生に比べて独立性は高いものの，一方，親への依存性も高いという結果を得た。この結果は，あくまでも中日間の比較であり，必ずしも中国人大学生の独立性が高いということを意味するとは限らない。中国や日本の文化的背景を考慮すると，単に独立性が低い日本人大学生に比べての相対的なものと考える方が妥当かも知れない。いずれにしても，大学生の独立意識の高さを考える場合，教育事情といった文化的背景や家族構造といった社会構造を考慮しなければならないであろう。

中国では，大学受験は全国共通試験であり，受験の機会は年に一度しかなく，その競争はとても激しい。また，1978年に中国政府が一人っ子政策を打ち出して以来，現在では一人っ子の家庭の割合が98%にも上がると言われている。子どもを一人しか持てない状況で，両親は愛情のすべてを一人の子どもに注ぐ傾向がある。一人の子どもにすべての望みを託すことになり，親たちは子どもに自分の理想を押しつける傾向があると言われる。そのため，中国の子どもたちは親の期待に応じて，幼い頃から強い競争心を持つようになり，常に自分を他人と比べながら成長している。学齢期の子どもにとっては，学業成績が実力の証であるとみなされるので，中国の学校では，子ども同士で互いの成績を比較することが日常的に行われている。多くの学校では，かつての日本の学校がそうであったように，試験の成績ランキングを公表して生徒の競争心を高めている。その結果，ランキングの上位にいる生徒が優越感を持ち，下位の生徒は劣等感を感じることになる。このような教育の過熱がもたらす弊害として，勉強さえできればよく，他人への思いやりに欠け，優しく豊かな心を持たない子どもが多くなったことが指摘されている。

一方，このような中国の子どもたちは大学に入ると，それまで受けてきた受験を大きな目標とした教育とは異なる高等教育を受けることにより，自分自身のことや自分が本当にやりたいことなどを真剣に考えるようになる。自分の将来の生き方や自我に対して成熟した考えを持つようになる。近年，欧米文化がさまざまな形で中国に入って来て，青少年の世界観や価値観に多大な影響を及ぼしてきた。鄭（2000）はWAI（Who am I?）技法（20答法）を用いて中国人大学生の自我概念を調べ，現代の中国人大学生が西洋の文化の影響を強く受け，自分というものを考える際に個性を強調するようになっていると指摘した。また，中国の一人っ子は兄弟がいないため，両親が十分の注意を子どもに配る反面，あらゆる面において親が子どもに干渉する。そのため，青年期に入るとともに親の守護から離れたいという気持ちが徐々に膨らんできて，親から独立した大人になりたいという気持ちとともに親に対しての反抗意識も強くなると考えられる。

大学生を含めた日本人の特質については，これまで様々な角度から論じられてきた。木村（1972）は，日本人について，対人関係という視点から精神病理学的な日本人論を展開している。日本人には常に「取り返しがつかないことをした」と思うことに起因する「済まなさ」というメランコリー的罪責感があるという。日常生活の面でも，仕事の面でも，秩序を重んじ，几帳面で義務感と責任感が強く，特に他人に対して非常に気を使うという特徴がある。人前での対面を傷つけられるような状況に陥ることを，あるいは対人関係における負い目を負わされるような立場に立つことを極度に恐れる。そして，自分が悪いということと，誰かに迷惑をかけているということが表裏一体になっていると主張している。南（1983）は，日本人の自我構造では，外的客我の意識が強く，他人から自分を意識しすぎる自意識過剰が自我構造全体に影響を与えていると指摘している。また，河合（1997）は「母性社会・場の理論」という視点から西洋人の自我意識と対比させて日本人の自我を論じている。西洋人は意識の中心に自我があり，無意識の中心にある自己とつながりを

持っているのに対して，日本人にはそもそも自我の意識が希薄であり，時には無意識内にある中心（自己）をしばしば外界（例えば，天皇，君主，家長など）に投影し，それに対しては自分をまったく卑小と感じたり，絶対服従することもあると論じている。これらの論点の共通したところは，自己意識としての自我が周囲にいる他者に強く規定されるという点であろう。

今回の調査によると，日本人大学生の男女とも中国人大学生の男女より独立性が低かったのは，日本文化において青年期の自己再構成の特質のひとつとも言える相互協調性が相互独立性より一貫して優勢であると指摘した高田（1999）の知見とも一致する結果であった。これは，また青年が自己を再構成してゆく際に，相互独立性の発達はむしろ抑制され，日本文化に適合した自己のあり方が積極的に取り込まれるという高田・松本（1995）の示唆とも一致している。

親子関係について

有意差が認められたほとんどの項目で中国人大学生が日本人大学生よりも高い得点を示した。この結果は，中国と日本の家庭内環境がかなり異なることを物語っている。

日本では出生率が毎年のように下がり続け，家族の少子化が進んでいる。自分を含め二人兄弟の子どもが過半数を占め，産後の急速な経済発展と相まって，子どもに対する裕福な養育条件が整った。稲森・中川（1982）は，日本の親子関係として次のような特徴があると指摘している。ひとつは，幼児期に親は子どもをとても保護的に扱う。そして，幼児期，ことに思春期前期くらいから次第に干渉が多くなり，過干渉になっていく。2つめは，干渉する内容が勉学の面に集中していることであり，それ以外の子どもの活動については驚くほど放置している。3つめの特徴は，子どもの養育が母親主導であり父親の参加が希薄であるということである。

中国の親子関係を概観すると，親と子が口に出さなくてもお互いの気持ちが分かるという精神的な親子の連帯意識が強く，結婚後も近くに住み，老後も同居を望むなど，生涯にわたって親との関係を密に保とうとする意識が強いという風に見受けられる。この背景には，伝統的な儒教の影響が考えられる。

費（1985）はマクロ的視点によって東西の親子関係を対比した。中国における親子関係は，西洋のそれとは区別して「フィードバック型」と名づけられ，親が子どもに対して養育を行い，それが長じては子どもが親を扶養するという権利・義務の双方向的な授受を規範化するモデルで示された。それに対して，西洋の親子関係は「リレー型」と名づけられたものであり，親が子を養育し子どもからの扶養というフィードバックがない片道通行的な関係であるとし，それを次の世代に受け継いでいくとした。フィードバック型モデルは儒教の「孝」観念とも非常にうまく一致する。実際に中国の農村においては，子ども（息子）が親の老後をみるという伝統が根づいている。

しかし，近年の中国における急速な経済発展につれて，社会的な大きな変化があらわれ，それによる新たな多くの問題が生じている。そのひとつが家族関係の変化であり，見逃せない問題のひとつと言われている。とくに都市部における親子間に十分なコミュニケーションがなく，子どもを放任している家庭が増えつつある。一昨年，北京のあるゲームセンターで火事が起こり，多数の中高生が死傷した事故があった。この背景として，何に使うのかを聞かず子どもに金銭を渡す親がいて，子どもはそのお金でコンピューターゲームやインターネットに熱中し，家に帰らず徹夜で遊んでいるということが指摘された。最近の中国の子どもを称する言葉として，「小皇帝」，「小太陽」とか，「啃（コウ）老族」といったものが広く知られつつある。小皇帝や小太陽とは，一人っ子政策によって親に過保護に養育された子どもを揶揄する表現である。またコウ老族とは，親を食いつぶすという意味があり，大人になっても経済的に親に依存する若者を指す言葉であり，現代中国の若い世代の様相を象徴する言葉として受け取られている。

参考文献

Erikson E. H. 1968 Identity : Youth and Crisis. W.W. Norton & Co., inc（エリクソン，E. H. 岩瀬庸理訳（1973）アイデンティティ—青年と危機 金沢文庫）

費　孝通　1985　家庭結構変動中的老年贍養問題　費孝通文集　第9巻（費　孝通・横山廣子訳　家族構造の変動における老人の扶養問題『生育制度—中国の家族と社会』東京大学出版会）

稲森　博・中川志郎　1982　日本型親子—父性と母性の問い直し　講談社

加藤隆勝・高木秀明　1980　青年期における独立意識の発達と自己概念との関連　教育心理学研究　**28**, 336-340.

河合隼雄　1997　母性社会—日本の病理　講談社

木村　敏　1972　人と人との間―精神病理学日本論　弘文堂
南　博　1983　日本の自我　岩波書店
落合良行・佐藤有耕　1996　親子関係から見た心理的離乳への過程の分析　教育心理学研究　**44**, 11-22.
小野寺敦子　1993　日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究　心理学研究　**64**, 147-152.
長田雅喜　1972　親子関係の社会心理（大西誠一郎編　親子関係の心理）金子書房　87-106.
繁多　進　1991　一人っ子を持つ親の心理　児童心理　**567**, 11-18.
鈴木乙史　2003　家族関係と性格　性格心理学への招待　サイエンス社
園田茂人　2001　中国人の心理と行動　日本放送出版協会
高田利武　1999　日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程―比較文化的・横断的資料による実証的検討　教育心理学研究　**47**, 480-488.
高田利武・松本芳之　1995　日本的自己の構造―下位様態と世代差　心理学研究　66
鄭　寧　2000　从埃里克森自我统一性理论看当代大学生人格发展　北京建筑工程学院学报　**16**, 105.

How university students of different social cultures in China or in Japan negotiate their dependence or independence?

TIANSHUO GAO (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)
TSUNEO KITO (*Department of Psychology, Kurume University*)

Abstract

This study explores how university students of different social cultures in China or in Japan negotiate their dependence or independence. It examines to what extent university students who study in China or in Japan being dependent on or independent of their parents. The questionnaires were taken among Chinese and Japanese university students on the basis of the independent consciousness scale (Kato & Takagi, 1980) and the shortened version of the parenthood scale (Ochiai & Sato, 1996). In terms of dependence and independence, it was found that there are differences between Chinese and Japanese university students. Chinese students depend on their parents much more than Japanese students do. However, the independence consciousness of Chinese students is also significantly higher than that of Japanese students.

Key words: Chinese and Japanese students, dependence, independence, parenthood

付録1　独立意識尺度（加藤・高木，1980）の日本語版と中国語版。●印の項目は逆転項目。

日本語版	中国語版
独立性	**独立性**
自分自身の判断に責任を持って行動することができる。	能负责任的将自己的判断付诸实施。
たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひけめを感じることはない。	在学校里无论我的成绩如何不好我都不会产生自卑感。
●自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。	我并不知道我自己真正想要做些什么。
社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。	我认为在这个社会里有我应该担任的角色。
●自分の考えが変わりやすく自信をもてない。	自己的想法很容易改变，而且对自己没有自信。
●小さなことでも、自分で決断することができない。	连一件小事都不能自己做出决断。
生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。	很努力的使自己的个性在生活中得到充分发挥。
生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	不能够找出自己活着的意义和价值。
まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる。	只要觉得自己的想法是正确的就算周围的人都反对也能够坚持自己的主张。
自分の人生を自分で築いていく自信がある。	有自信自己创造出自己的人生之路。
親への依存	**对父母的依赖**
親といるだけでなんとなく安心できる。	只要和父母在一起就会没原由的安心。
自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている。	当自己不能对某件事情下决心的时候会听从父母的意见。
何かする時には、親に励ましてもらいたい。	无论做什么都希望得到父母的鼓励。
親は自分の心の支えである。	父母亲是自己的精神支柱。
困ったときは親に頼りたくなる。	当遇到困难和烦恼时习惯依靠父母亲。
反抗・内的混乱	**反抗与内部混乱**
両親に対して自分のことを打ち明けて話す気にはなれない。	不会产生与父母亲敞开心扉交流的想法。
親や先生の言うことには、たとえ正しくても反対したくなる。	就算父母和老师说的话是正确的也会反对。
大人に対してひけめを感じることが多い。	经常会感觉到自己不如成年人或感到自卑。
親に対して自分の意見を主張したいが、自信を持てない。	很想对父母主张自己的意见但是没有自信。
両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。	自己也很想和父母沟通，相互理解，但总会无意的产生反抗心理或发生摩擦。

付録２　親子関係尺度（落合・佐藤，1996）の縮小版（母子関係）の日本語版と中国語版

日本語版	中国語版
子が親から信頼・承認されている親子関係	**孩子得到父母的信赖与承认**
母親は、子供のことを信じているのであまり口うるさくない。	母亲因为相信孩子，所以不会唠叨。
母親は、私のことを精神的に大人になったと認めている。	母亲认为我在精神上已经是一个大人了。
母親は、私の考えを尊重し、自分の意見を押し付けることはない。	母亲会尊重我自己的想法，不会将他的意见强加给我。
母親は、私を一人の人間として認めている。	母亲承认我是一个有能力的人。
母親は、干渉しないが、いつも私のことを気にかけている。	母亲虽然不会干涉，但是总是很留意我的行动。
母親は、私を信頼してくれている。	母亲很相信我。
母親は、私が大人であることを認めてくれている。	母亲承认我是一个成年人。
親は子を危険からまもる親子関係	**保护孩子远离危险的母子关系**
母親は、私の夜の外出を許可してくれない。	母亲不允许我在夜里外出。
母親は、私に夜一人で外出させないようにしている。	母亲尽量不让我在夜里一个人外出。
母親は、私が盛り場やゲームセンターに行く事を禁止している。	母亲禁止我去热闹的地方或者游戏娱乐场所。
私が夜外出するときには、母親がついて来ることが多い。	我夜里外出的时候，母亲多数会跟着来。
母親は、私が夜遅く帰るときは迎えに来てくれる。	母亲会在我夜里晚归的时候来接我。
母親は、私が酒やタバコに近づけないようにしている。	母亲不允许我接近烟酒。
私への危ない誘いは、母親が断ってくれる。	母亲会替我拒绝糖衣炮弹般的危险诱惑。
親が子と手を切る親子関係	**父母对孩子放任，不关心**
母親は、私をほったらかしにしている。	母亲对我持放任自由的态度。
母親は、私に家に帰ってこなくてもいいと言う。	母亲允许我不回家也可以。
母親は、「勝手に生きればよい」と言って私の世話はしてくれない。	母亲对我说“你怎么生活是你的自由”，并不照顾我。
母親は、私が何をしてもお構いなしである。	母亲认为无论我做什么都没关系
母親は、私の進路について全然関心がないようだ。	母亲对我将来的出路漠不关心。
母親は、子供のことについて責任を取る必要はないと言っている。	母亲认为没有必要为孩子负任何责任。
母親は、私にあまり関心をもっていない。	母亲对我的一切都不怎么关心。

付録 3　親子関係尺度（落合・佐藤，1996）の縮小版（父子関係）の日本語版と中国語版

日本語版	中国語版
子が親から信頼・承認されている親子関係	**孩子得到父母的信赖与承认**
父親は、子供のことを信じているのであまりロうるさくない。	父亲因为相信孩子，所以不会唠叨。
父親は、私のことを精神的に大人になったと認めている。	父亲认为我在精神上已经是一个大人了。
父親は、私の考えを尊重し、自分の意見を押し付けることはない。	父亲会尊重我自己的想法，不会将他的意见强加给我。
父親は、私を一人の人間として認めている。	父亲承认我是一个有能力的人。
父親は、干渉しないが、いつも私のことを気にかけている。	父亲虽然不会干涉，但是总是很留意我的行动。
父親は、私を信頼してくれている。	父亲很相信我。
父親は、私が大人であることを認めてくれている。	父亲承认我是一个成年人。
親は子を危険からまもる親子関係	**保护孩子远离危险的母子关系**
父親は、私の夜の外出を許可してくれない。	父亲不允许我在夜里外出。
父親は、私に夜一人で外出させないようにしている。	父亲尽量不让我在夜里一个人外出。
父親は、私が盛り場やゲームセンターに行く事を禁止している。	父亲禁止我去热闹的地方或者游戏娱乐场所。
私が夜外出するときには、父親がついて来ることが多い。	我夜里外出的时候，父亲多数会跟着来。
父親は、私が夜遅く帰るときは迎えに来てくれる。	父亲会在我夜里晚归的时候来接我。
父親は、私が酒やタバコに近づけないようにしている。	父亲不允许我接近烟酒。
私への危ない誘いは、父親が断ってくれる。	父亲会替我拒绝糖衣炮弹般的危险诱惑。
親が子と手を切る親子関係	**父母对孩子放任，不关心**
父親は、私をほったらかしにしている。	父亲对我持放任自由的态度。
父親は、私に家に帰ってこなくてもいいと言う。	父亲允许我不回家也可以。
父親は、「勝手に生きればよい」と言って私の世話はしてくれない。	父亲对我说“你怎么生活是你的自由”，并不照顾我。
父親は、私が何をしてもお構いなしである。	父亲认为无论我做什么都没关系
父親は、私の進路について全然関心がないようだ。	父亲对我将来的出路漠不关心。
父親は、子供のことについて責任を取る必要はないと言っている。	父亲认为没有必要为孩子负任何责任。
父親は、私にあまり関心をもっていない。	父亲对我的一切都不怎么关心。